
黙示録

フェニックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黙示録

【Nコード】

N2520BA

【作者名】

フェニックス

【あらすじ】

人間の心を守るカオス軍。巢食うソーサリー軍。それはカオス予備軍の学生の物語だった。

南条 列。通称、烈火のシャクヤ。兄、隼人。通称、シルバーオックス。列の恋人であり幼馴染みの祐希みずほ。通称、水虎のキヨウカ。同じく幼馴染みのパトリック・レッドガー。通称、鋼のトウゴウ。

彼らは学園と人間の心の世界を行き来する。

ある日、廃墟となった病院の医者的心をソーサラー軍に占拠された。一夜にして崩壊した病院。医者的心に介入したカオス予備軍に待っていたのはかつての同僚がソーサラー軍の毒素で変わり果てた姿、夜叉の死神だった。

死神は死神四天王をたずさえ、シャクヤ、シルバーオックス、キョウカ、トウゴウに決戦を要求するのだった。一回戦、シャクヤ対デット ナイト。ナイトの正体はシルバーオックスの師匠、ムーンドウスだった。新しい必殺技を携えたシャクヤはムーンドウスの修行を終える。二回戦、キョウカ対デット ワイパー。圧倒的な力に屈するキョウカ。それを見たシャクヤは乱入し二人の絆で打ち倒す。一応、反則負けだったが、勝負は1対1。最終戦はタッグマッチを要求され、シルバーオックス、トウゴウ対デット モンク、メイジ組だった。モンクは魔法で身体能力を強化し、メイジはトランプのカードを使う。かつて無い戦いにムーンドウスはメイジの正体を暴こうと四人の戦いを見る為、駆けつけるのだった。

黙示録

ムーンドゥースはデットメイジの正体をなんとなく掴んだ。彼は、ちようどこの世界が人間の心を監視し始めた頃の戦士の末裔だったが、シルバートックスと鋼のトウゴウは知らなかった。

「さて、どうする？ トウゴウ。今の所、奴はノーダメージだ」「わからない。彼のような能力は解析できないんだ。その場に合ったカードを召喚する。シルバートックス。もし彼が本当にカードのディーラーなら心理戦が有効だ。ディーラーは精神が揺らいだ時、ミスを犯すと言う」「精神が揺らいだ時？ 例えば相手より強いカードを出した時とか？ だが俺達は召喚カードなど使えんぞ」「ジャックの驚で対空攻撃。クイーンの熊でガード。エース騎士で攻撃。……………今出したカードで何が出来る？ 逆利用できそうなカードは？」

「ヒョヒョヒョ……………なあメイジ。そろそろチェンジしようぜ。あきちまう前にな」「モンク。まあそう焦るな。奴等も動揺してるのさ。あのムーンドゥースは気づいたらしいがな。ナアお師匠さんよ。そろそろ教えてやんなよ」

「ムーンドゥース師匠。彼は何者なんです？」

ムーンドウースは腕を組み静かに話した。「……………メイジ。君は我々の心が読めるらしいな。……………シルバーオックス。我が弟子よ。よく聞け。人は過去を忘れたがる。そこに秘法があるからだ。彼は何者なのか？私の推理が正しければ彼は今から1万年前の戦士の末裔。滅んだはずの古代文明の末裔。彼らの能力は今の科学でも解明出来ない部分がある。あくまでも臆測の範囲だが……………」「正しいさ。その推理は。俺の名はファウストのメシア。この世界の創始者の末裔。死神は利用したに過ぎない。我々は滅んだ訳ではない。人間の精神の世界に幽閉されていた。それを掘り起こしたのが死神。ただ、それだけだ」

「死神！お前はなんて奴を解き放った！」「申し訳ございません。夜叉の鴉様。そんな事とは知らずに彼のトリックにかかり……………」「言い訳は無用だ！私はスパイダー様にご報告をする！お前は見届けるのだ！」「……………ハア。すいません」

「ヒョヒョヒョ。そいつぁーすげーや。俺もやり合いてえなあ」「構わんが。どうせお前も死神四天王などで収まる器ではあるまい。私も自分の実力がどこまで通じるかわからないんだ。特別サービスをしよう。キングカード オープン！」メイジはモンクと死神にキングカードを投げた。

「なんだ？何も出てこない。失敗か？」

「……………シルバーオックス。鋼のトウゴウ。私もタッグを組みたい。どうだね？君らさえ良ければだが……………」

「ンンン……………アノ……………すみませんが……………ナゼ僕はここに？」「ン？お前の名は？」「僕はエドワード・スカイ。アノ……………この鎖鎌に黒装束。……………何ですか？コレ」「……………私はシルバーオックスの師匠。ムーンドウスだ君は……………カオス軍かね？ソーサラー軍かね？」「カオス軍に決まってるじゃないですか！それよりココ、どこです？それにシャクヤ先輩にキョウカさんが倒れてる。何してるんですか？回復を急がないと」「死神……………何も覚えて無いのか？何も」「死神？僕はエドワード・スカイですよ！誰ですそれ？」

「シルバーオックス。聞け！死神のソーサラーの呪いが解けた。そのカードは」「浄化のキング。私からのプレゼントさ」「って事は……………モンク。お前」「あんたらカオス予備軍だろ？なら俺の仲間さ。空いてるんだろ？隣。俺もやるぜ。良いだろ？」「……………ど

うする？トウゴウ」「浄化したなら大丈夫じゃないか？戦力も必要だ。頼めますか？モンクさん」「あのよ、ソノ………モンク？なんかねーのか？他に言い方」「ジャーお名前は？」「そーだなー。何でも良いがシェオロン。一応、俺もファウストな。ヨロシュー」「君も幽閉されていた。そうかな？」「まあな。いずれそのメシアともケリをつける日が来ると思いながら1万年。カー根性ワリーナー俺は。まあ良いか？」スーッと息を吸い込み気合いを入れる。「ヨッシャー！ファウストのシェオロン！コレより貴公等を援護する！心セヨ！」

「死神。良いのか？………って………いなかったな」「ダーカーラー！ムーンドウースのお師匠様。死神って誰なんです？手伝って下さいよ。二人の回復」「二人、驚くだろうな。また倒れなきや良いがな」トウゴウは笑った。「さて、役者は揃ったな。1対5。ウチ二人は戦力にはならないから、引いて3だ！」

続く

黙示録 その2

デットメイジ。彼は1万年の時を越え人間の精神に幽閉された戦士、ファウストメシアだった。同じく幽閉されていた戦士がいた。ファウスト シェオロン。彼はシルバーオックス、鋼のトウゴウの元に歩み寄る。

「へ？僕が彼らを解き放った？………そうなんですか？すみません。全く覚えて無くて」「イヤ。良いんだ。エドワード。戻っただけでも大収穫だ」「そうですね。一応、ソーサラーみたいだったですから。僕は」「気にするな。今はカオス予備軍。そうだろ？」「受け入れて頂けるなら。学園長。どうです？」

「ザーザー………良からう。エドワード スカイ。これより援護に向かえ！今、衛生士を送った。こちらから信号を送るより直接、行った方が効果があるからな。頼めるかな？エドワード スカイ。ファウスト シェオロン」

「ハイ。ありがとうございます」「充分、活躍させてもらっぜ」

「スパイダー様。ご連絡があります……………」
「ナニ？夜叉の死神が黙示録を解いた。……………鴉よ。案内しろ！ワシも出る。丁度良いではないか？我が息子、双子が黙示録を連れてきた。樹は熟した。大輪の樹に果実を実らせて。コレを逃す理由もない！出立の用意を」

「スノ……………スノ。失礼しますの。ハラハラ！大変ですの！お注射ですのー！」
「……………スノちゃん？スノちゃんか？……………来てくれたのか？」
「それだけでは無い」
「アツ……………貴方は。先生。アカデミック カイザー！」
「生徒を送り出すのが教師の仕事だ。二人の回復は我々に任せて行け！エドワード！彼らに加勢しろ！」
「ありがとうございます。先生！」
「忘れ物だ。受け取れ」
「僕の武器。忍者カゲツの」
「ウム。変身だ！早く装着しろ！」

「アカデミック カイザー。1つ勉強させて貰ったよ。カオス予備軍の絆を。我が弟子、シルバーオックスや少年たちの夢の道を。彼らの力はソーサラー軍を越える。良き弟子を持ったなお互いに」
「ムーンドゥース。我々の出番もくれなそうですね。引退ですか？」
「フフフ。歳はとりたく無いものだ。どうだね？コレが終わったら一杯やらんかね」
「喜んで。期待してますよ。ムーンドゥース」

「忍者カゲツ！装着！」ガシュッ

「おかえり。カゲツ。待っていたよ。よく戻って来た。サア。行くうー！」「ハイ！トウゴウ先輩！」トウゴウは手を差し出す。その手をしっかり握るカゲツ。

「ヨオ。出戻り。もう放すなよ」「シルバーオックスさん。わかってますよ。一度地獄を見てますから」「頼むぜ！相棒」シェオロンとカゲツはリングサイドについた。「シルバーオックス。バックアップは任せろ。俺達がいる」「アア。行くぞ！メシア！」「話しは終わったかね？君達。なら、ゲームを続けよう」「メシア！必ず揺さぶってやる！貴様のその自信を！今日でカジノは閉鎖だ！」

続く

黙示録 その3

「サア、次のカードをきろうかね？ジャックカード！オープン！」

「クッ………来たか。槍を持つ騎士」「シルバーオックス！跳べ！上空から攻めるぞ！」「イヤ。違うな。俺に策がある」

シルバーオックスは金網をかけ上がりメシアに向かう。「無駄ですよ。スピードでは勝てませんから。追え！ジャック！」「イヤ。はなからスピード対決など望んでいない。ジャック。お前の周りが手薄になる瞬間を待っていた。そしてガトリングを引き………」

ガシュコン

「一気に畳み掛ける。ズガガガガッ！」「ナニ？三角跳びから旋回してマシンガン。戻れ！ジャック」「オセーワ！捕らえた！ジャック。至近距離で銃撃と槍。どちらに軍配が挙がる？槍はリーチが長い分、至近距離では無力だ！喰らえ！弾丸烈波！」シルバーオックスはありったけの弾丸を至近距離で当てた。

ズガガガッ………ドカーン！衝撃と共にジャックが落ちた。「やったか！」「イヤ。寸前でポイントをずらしている。おそらく……」「爆風の中、ジャックは仁王立ちしていた。「やはり。ダメージ

は少ないか」

「パチパチパチ………当てた位だな。少しだけ。君達はこのカードの実体を知らないだけだ」「カードの実体？」「そう。カードの実体。カードはしなる。ナゼだと思うかね？それは攻守一体だからさ。その撓りが攻撃と防御を両立出来るからだ。そこから召喚されたジャック。彼に死角は無いのさ」「……………脆さ故に最強か？どうりで空を斬る感覚しかなかった訳だ。カードの騎士ジャック」「替われ！俺と！やりたくてしゃーねーや」「シャオロン。……………どうする？トウゴウ」「シルバーオックスさん。奴の素性が見えたただけでも充分です。補給して下さい」「わかった。すぐに行く」

シルバーオックスはシャオロンとチェンジした。「頼んだぞ。新人。少しづつでいい。奴に隙を」「オオヨ。わかってらーに。んじゃま、行きますかね。メシアさんよー」「……………フン。来たか。同志。ありがたく思え。私のゲームに参加出来て」「ツタク、テメーア、1万年前から変わらん。メシア。いつもそうやって見下して」「見下す？失敬な。ゲームに参加出来ただけでもありがたく思わなきゃ」「ヘイヘイ。また上からね。フリーンだよなー！オドリヤー」シャオロンは如意棒を握った。

グロロローツ「黙れ！ジャック！俺は奴に用があるんだって！って

……退いちゃくんねーよな。んじゃマ、イゴーか？」如意棒、対槍。リーチは一緒だった。

「どう見る？ トウゴウ」「リーチが変わらなければ後はテクニク。魔法の騎士と魔法で強化したシャオロン」「イエ。違います」忍者カゲツがコタチを眺めながら話す。「良いですか？ ジャックは攻守一体だと聞きました。だとすると無駄に動かない方がベストなんです。動けば奴の力を発動させる事になりますからね。かの有名な巖流島の武蔵と小次郎もそんな戦いだっただけですよ」「心折れた者が動く。不動心だな」「そうですね。実際シルバークスさんの攻撃で悟ったんですがね」

二人はジリジリと距離を詰める。お互いの剣先が触れた瞬間、お互いの動きが止まった。「これからだ。勝負は」「あの空間。誰も入れない威圧感。これが1万年前の戦いか？」

アリーナは静まり返っていた。風も空気も全てを超越した空間がそこにはあった。

続く

黙示録 その4

メシアの召喚したジャック。人間の精神に幽閉されていたシャオロン。剣先が触れる間合いでお互い止まる。ジリジリと詰め寄るジャック。迎え撃つシャオロン。

「これぞ達人の間合い。呼吸する余裕すらない」「先に動けば負ける。かと言って何もしなければそれまで」「介入する余地さえ与えない。これが間合いの極意か」

三人はただ見守るしかなかった。

「ここか？例の場所は？」「左様で。行きましようか。スパイダー様」「ウム」

「ン？ソーサラーの介入信号？誰だ？」トウゴウは上空を見上げた。「デカイ信号が2つ。1つはさっきの夜叉の鴉。もう1つは……」「スノツ……スノツ……スパイダーですのー！ビョエーイ」「スノちゃん。スパイダーだって？本当か？」「山が動いた。奴が」「シルバートックスは上空を見上げた。」「スノちゃん！早く二人を隠して！僕も行く！」カゲツはリングサイドから飛び降り、ジャク

ヤとキヨウカの元へ走る。

バリバリバリッ……………ズガガン！天井が割れ、2つの黒い影が降りてくる。

「ごきげんよう。諸君」カラスを両肩に乗せ、カラスの羽の黒いマントをたなびかせ夜叉の鴉が挨拶をする「貴公等の観戦に来た。都合が良くてな。これで後継者と1万年前の戦士が手に入る」青銅の錆びた鎧を纏いし男。黒いフードに身を包み、全てを闇に包むインパクトと共にスパイダーが降り立った。

「貴様が我が父、スパイダーか？」「シルバーオックス。久しぶりだな15年ぶりか？我が息子よ」「黙れ！何をしに来た！」「観戦にと言わなかったかね？」「観戦だと！うぬぼれるな！貴様を父親と認めた事は無い！これまでも。これからも！ナゼ、カオス軍を裏切った！」「サアな。なんせ15年前だ。忘れたさ。なんせ昨日、殺った人間も忘れた位だ。しょうがないだろう？それよりあの二人なかなかの達人よ。我々が来ても微動だにせぬ。見せてもらおうか。ファウストの力とやらを」「スパイダー様。お疲れでしょう。サアサア。お掛け下さい」「ウム。くるしゅうない。楽にいたせ。鴉よ」

二人はいまだに距離を量っていた。「チツ。隙も糞もありやーしねーぜ。どうするね。シャオロンさんよー。仕掛けるか。……………行かなきゃいけねーかな？隙がネーナラこっちから誘うまでだ。チツター、ヘビーかも知れんが、やるっきゃねーな。行くぜ！トウリヤッ！ハイ！」

如意棒がジャツクの顎を捉える。ぐらつきバランスを崩すジャツク。「面アリ！一本！ヨッシャッ！畳み掛けんぜー！覚悟シイヤー！……………セイ！セイ！セイ！ウオツリヤーッ」シャオロンの如意棒が無数の残像を残し、ジャツクに当たる。「トドメじゃい！ヒョーウー」シャオロンは地面に如意棒を突き、天高く舞い上がる。「俺流殺法！天・誅・殺！」素早く如意棒を戻し、ジャツクの頭を上空から撃ち抜く。

「クッ。戻れ！ジャツク！カードクローズ！」ジャツクのカードがメシアの手に戻る。

クルクルクルーツ。如意棒を回しながら着地するシャオロン。「ハイ！どうでい？メシア。んまあ肩慣らし程度にな。暫くは使えんだ

ろうが。そのカードは。ザンマーネーナー。出てこいや！んな小手調べでオリヤ倒れんぞ。だろ？」「らしいな。シャオロンさん。その繊細さと大胆さ。素敵ですねえ。宜しいんですか？私を挑発して？」「挑発ダア？先に仕掛けたのは誰だったっけねえ？」「クックツクツ……………私だ何か？」「次は何だ？ピエロさんよ」「もう少し、楽しませて下さいな。カードナンバー セブン！オープン！」「ナンバー セブン？聞いたコタゝねーぞ。何だ？」

シャオロンの影が盛り上がる。「ナツ……………何だ？俺の影が……………」「私の好きなカードなんでね。取っておいたんですよ。お後はエースカード！オープン！二重召喚！」メシアはエースカードを上空に投げた。پیギィー。鷲が召喚される。「ゲゲツ……………鷲力ヨ！。まっじーな！。俺の影に鷲。ハ……………どうすんべ？」「俺が行く！シャオロンは影を」「トウゴウ！ありがてーや。任せんぜ。俺の上はキツチリ守れや！」「了解！撃ち落とす」

シルバーオックスはスパイダーを睨んでいた。

「オヤジ！俺に恥をかかせないでくれよ！介入はするな！」「良く吼える狼だ。さすが我が息子だな」「認めた覚えは無い。言っただけだ！ジイサン！」

続
く

黙示録 その5

「ウーン……………僕は……………そうだ！キョウカさんは？」「ツタク。ダーリン！いつまで寝てるの？」「スノ。スノ。起きますの！」「スノちゃん！来てくれたんだ！ありがとう」「感傷に浸っている暇は無さそうですよ。先輩」「エドワード！助かったのか？」「シヤクヤ先輩。色々とありまして。……………まずはすいません。理性が無かったとは言え、貴殿方を傷つけてしまって」「構わないさ。お陰で新しい能力に目覚めたんだ。ナア、キョウカ！」「果たしてそうかしらね。まだ完全には使いこなして無いんだし。あの融合魔法も偶然と言われればそうかも知れないしね。ア……………ありがとね。助けてくれて」「で、今、兄さん達が戦っているのは……………」「1万年前の戦士だ。かつての僕が封印を解いた」「イ……………1万……………」「それだけじゃ無いわ。上からスパイダー。貴方のお父様ね」「ナニ！スパイダーだって！あの男。兄さんが目を離さないあの男が」「ネー、エドワード。その封印はどこで解いたか覚えて無いかしら？もう一度、封印とかつて都合良くない？」「たぶん……………今いる近くに。おそらく……………この人間の精神のどこかに」「1万年前の戦士の封印か。で、動けるのは僕らだけ。なんとかこの戦域を脱出できないかなー？」「バレない様にですか？確かに。さすが先輩。今までのファウストしか頭に無かった。要するに、スパイダーもあのファウストを連れ帰りに来た。シヤクヤさんにシルバーオックス、ファウストと揃えば山が動くのも無理は無い」「スノ。スノ。アノ……………回復の為に一時戻る事しておけば良いですの。そうすればこの戦域は出れますの」「治療の為、戦線離脱で、注意が逸れた隙に探す。よし！俺が掛け合おう。キョウカさん。倒れてて。芝居して」「わかったわ」

「スパイダー！それからファウスト！提案がある！俺達の完全回復に戦線離脱を要求したい。許可してくれ」「リタイアか？できれば君達ともやりたかったが……………彼女が倒れているならしょうがない。許可する。行け！」「ありがとう。ファウスト メシア。必ず戻る。約束だ」「小僧。ぬるま湯だ。戦えぬ者は戦域を立ち去れ！どこへ逃げても小僧は小僧だ。立ち去れ！」「兄さん……………後は頼む」「アア。彼女に宜しくな」「実は……………ボソボソボソ……………」「フムフム。そうか芝居か。封印は頼んだぞ。兄弟」「兄さん達も。無理はしないで。一緒に帰ろう」「わかってる。ここで終わらせるんだ。俺達の父親とも」「ウン。ジャーね」

四人は戦域を出た。「ちょうど乗り捨てた、ドリルプレッシャーがある。これで行こう。皆、乗って」「私も。マリンプレッシャーで行くわ。二手に別れましょう。効率が良いわ」「イヤ。一緒だ。俺達は。二機で行く。ついてこい」

「エドワード。怪しいポイントがあれば直ぐに知らせてくれ」「わかりました。行きましょう」

四人はマシンに乗り込んだ。

トウゴウとシャオロンはメシアが召喚した影と鷲に苦戦していた。

「クソッ！どうなってやがる！俺の影なんて」「こっちも。シャオロンさん！一ヶ所に集めましょう。分散しても消耗戦だけです」「オッシャ！行くぜ！トウゴウさん」二人は一列になった。「重なつたぜ！トウゴウ！俺を踏み台に跳べ！」トウゴウは空中で鷲を捕らえた。「今です！シャオロンさん！影を俺の下に誘導して！」「行け！トウゴウ」「チェンジ！ソードアーム！……………ウオーッ！」「トウゴウの腕がソードに切り替わる。「落としてやる！セリヤーッ」トウゴウはありったけの力で撃ち落とす。ピィギィー。鷲はバランスを崩し落ちる。シャオロンは影を押さえていた。

ズガガガン！

影と鷲はぶつかる。「チーッ……………戻れ！セブン！エース！カードクローズ！」「フン。容易い」「苦戦しましたがね。次はどんなカードですかね？」「貴様ら！許さん！我がカードを侮辱しておつて！」「感情が高ぶっているのか？彼は動揺しているみたいだ。ポーカーフェイスだからわからんがな」シルバーオックスは分析した。

「スパイダー様。一応、偵察機をつけておきますか？連中に」「構わん。無駄だ」「かしこまりました」

スパイダーのその余裕が後で命取りになる事は誰も知らなかった。

続く

黙示録 その6

「エドワード。怪しいポイントは？」「今の所無さそうですよ。随分と荒んでいますかね」「ハーツ……………付いてこなきゃ良かった。レディーがこんな所。ネエ、スノちゃん」「チョコ食べますの？スノ。美味しいですよー」「……………聞いた私がバカだったわ。帰ったらシャワーでも浴びないとね」「……………待てよ！前方のケージ。何かを解き放った跡が。エドワード！マシンを降りて偵察に行くぞ」「私はお留守番。援護するわよ。マシンから」「お願いします。行きましょう。シャクヤさん」「キョウカ。異変があったら直ぐに連絡してくれ」「了解ですよー。ングツングツ……………チョコの欠片が喉に」「ドーン！大丈夫？……………ごめんなさいね。行つてらっしゃい。ダーリン」「ゴクツ……………フーツ助かりますの」「任務中よ！チョコなんか食べてる暇は無いでしょ！スノちゃん」「スノ……………わかりますの。ならキャンデーは大丈夫ですよ？」「ダーメツ！貸しなさい！」「ムギースノー！スノー！返しますのー！スノー！」「……………シャクヤさん。連れてきて良かったんですね？」「しよぅがないだろう？こんな者だよ。女なんて」「そうですね」「……………聞こえてるわよ！二人とも！」「そうですね！」「このケージ。何だ？シャープに斬られた跡が」「ええ。カードですかね？メシアが召喚した何か」「こつちには中から棒で破った跡が」「自力で出たんですかね？」「イヤ。それはない。君が……………ソーサラーだったかつての君が封印を解いたと。だがこのケージの衝撃。どれも中から突き出た様な跡だ」「おそろく……………結界か何かで力を抑えていたでしょう。その界を破ったのが僕なんですかね？」「調べる必要がありますうだな。付いてこいエドワード」「……………もし……………もしこの先に行って、僕がまた……………傷つけたく無いんです」「信用してるさ。エドワード。じゃなきゃワザワザ助けに来ないだろ？

君がソーサラーの毒素に犯された時も憎かった。それはあのスパイダーのやり口にだ！信じていたから。こんな所で折れるカオス予備軍の絆では無いと。…………ごめんな。今まで言えなくて」「……………そうだったんですか？すいません。行きましよう。これは僕のケジメです。巻き込んでしまつて…………」「気にすんな。今はカオス予備軍なんだろ？なら良かったじゃないか」「そうよ。エドワード。貴方が背負えない重荷。それを支えるのが絆よ。だから今、こうやつてチームを組んでいる。ダーリン！エドワード！命令よ！結果を探すわよ！」「キョウカさん。…………ソリヤー無いぜ。俺のセリフだったのによー。ヨシ！カオス予備軍！進軍開始！エイ！エイ！オーツ！…………オーツ！だよ。エドワード。右手を上げるの！こうやつて」「オーツ！……………こうですか？」「角度！角度だよ！オーツ！は」「…………フツ。悪く無いな。俺の新しい居場所も。ソーサラー軍に対抗する絆か」「ン？何か言ったか？エドワード」「イエ。何も。急ぎましよう。彼らとていつまで持つかわからないし、時間が無いんです。こうしてる間にも仲間が傷ついていると思うと…………」「急ごう！エドワード！」「オーツ！シャクヤ！俺は右を、君は左に注意してくれ」「忘れるな。これはカオス予備軍の戦いなんだ。お前一人ではない」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2520ba/>

黙示録

2012年1月12日11時47分発行